

# 史跡上野国分寺跡

## 発掘調査概要 2



1981

群馬県教育委員会

資料

文化財保護課保管

No. 57 - 88

昭和57年5月21日

# 序

史跡上野国分寺跡の保存整備事業も2年目を迎え、「国華」と謳われたその姿を少しずつ現してきました。発掘調査は遺構の残存状況が悪いなど困難な条件はありましたが、これまで定説とされてきたことに再検討を迫るなどの成果を得ることができました。また史跡地の公有地化も関係者のご理解とご協力により着実に進んでおります。

その概要を紹介し、今後の事業への礎とするために本書を刊行しました。関係者をはじめ広く県民の皆様にご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが本事業の実施に当ってご協力をいただいた文化庁、地元教育委員会など各機関、地元をはじめとする多数の方々に深甚の謝意を表する次第です。

昭和57年3月31日

群馬県教育委員会教育長 横 山 巖

## 目 次

I 遺跡の位置と立地環境	1	4) 第13トレンチ	16
II 調査に至る経過	2	5) 第14トレンチ	17
III 昭和55年度の調査	2	6) 第15トレンチ	18
IV 調査の概要	3	4. 遺 物	22
1. 目的および調査方法	3	1) 土 器	22
2. 調査の経過	4	2) 瓦	24
3. 遺 構	5	3) 石造物	26
1) 第5トレンチ	6	4) その他	27
2) 第11トレンチ	10	V ま と め	28
3) 第12トレンチ	12		

## 例 言

- 1 本書は、群馬県群馬郡群馬町東国分他に所在する史跡上野国分寺跡の昭和56年度保存整備事業の概要である。
- 2 本事業は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
- 3 本事業は、史跡上野国分寺跡整備委員会（委員氏名は別記）の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課文化財保護主事前沢和之・洞口正史が担当し実施した。
- 4 出土資料については整理途中であるため、その一部を紹介するにとどまる。
- 5 出土した遺物は、群馬県教育委員会が保管している。
- 6 本書の作成、編集は前沢が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢・洞口が、遺物写真は前沢が担当した。Fig.2全体図は本事業で製作した航測図面(原図1/200)により作成した。

# I 遺跡の位置と立地環境

前橋市街の西方約4kmのところ、群馬郡群馬町東国分・同引間・前橋市元総社町に跨っている。地形的には榛名山の東南麓に広がる扇状地の端部にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地している。寺域の北西部は標高129.0m、南東部では同127.5mを測り、西から妙義・浅間・榛名・小野子・手持・谷川・赤城の山々に囲まれる景観をもつ。

史跡地は少しの墓地・原野・宅地のほかは畑地であり、かつては桑園が多かった。北側は群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。この東方約500mには国分尼寺があり、昭和45年の調査で6間×4間の講堂と推定される礎石建物が確認されている。また北東約1kmには白鳳期の創建とみられる山王廃寺、南東約1.4kmには国府推定地、同1.7kmには総社神社がある。国分二寺の中間を関越自動車道が南北に縦貫するが、これに伴う発掘調査が進められ、国分寺と密接に関係する多数の遺構と遺物が確認されつつある。



Fig. 1 上野国分寺跡と周辺の遺跡 1/50,000

## II 調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録に載る全国的にも重要な遺跡として知られていたが、大正15年10月20日付で史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で、推定寺域の南面部分も含まれている。昭和43年に関越自動車道の基本計画が立てられ、翌年度にはその整備計画が発表された。それによるとこの道路は寺跡の東側約150mのところを南北に走り、東南約2kmのところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により、国分寺跡周辺への開発の波及は必至と考えられるに至り、群馬県教育委員会ではこの保存のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との交渉を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土地買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和56年度までに総事業費10億6,000万円、買上総面積は50,597.35㎡で指定地の81.5%となった。

この土地買上事業の進展に伴い、昭和55年度から上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し整備のための各種の資料を得るべく発掘調査に着手した。昭和55年度は寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、56年度も同様の目的により発掘調査を実施した。

## III 昭和55年度の調査

寺域各辺・主要伽藍近くに第1～11のトレンチ（巾3m）を設定して実施した。

遺構 確認された遺構の概要は次の通りである。

- ① 第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣（SF01）が確認された。基底巾4.8～6m、上端巾（現況）1.5mで、高さは寺域内から0.7～1.4m、寺域外から1.3～1.8mを測り台形状の断面を示す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが版築の状況は見られない。南側に接して巾約3.6mの浅い溝（SD01）があり、また北側には巾40cmの小溝がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山B軽石の純堆積が認められた。築垣の走向はE-3°50'-Nである。
- ② 第5トレンチのE127付近で高48cmの基壇状の立ち上りが検出された。金堂の東方にあたり従来から東大門が想定されていた地点であるため、その基壇の一部である可能性が考えられた。またE108～112.4でも高34cmの削り出し基壇状の遺構が検出された。
- ③ 第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居（SJ01）が検出された。また寺域中央部を通る「参道」とも言われる南北に細長い地割は、約2mの深さに掘り込まれたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。
- ④ 南辺の第2・7、西辺の第3・4、北辺の第6・8トレンチでは、国分寺に直接関係する遺構は確認されなかった。

遺物 コンテナパット200箱分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器、中世土器も出土しており、特に奈良三彩片（2点）の出土が目される。

発掘調査に併せて、金堂・塔跡の現況実測図（ $\frac{1}{50}$ ）の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。また第1回整備委員会を昭和55年11月18日、同幹事を昭和56年3月5日に開催した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡一寺域確認発掘調査概要一』にまとめて発表した。

# IV 調査の概要

## 1. 目的および調査方法

昭和55年度に引き続き、寺域の確認および主要伽藍の配置に関する資料の収集を目的とした。トレンチ（巾3m）による確認をし、検出状況に応じて拡張を行なった。第12～15トレンチを設定したが、先年度調査の継続として第5・11トレンチの拡張を行なった。調査基準線は国家座標第IX系  $X = +43,750.0$ 、 $Y = -72,500.0$  を中心とし、北より4°西偏させて設定した。各トレンチ、遺構の位置は、この中心から東西南北方向への距離をもって示した。

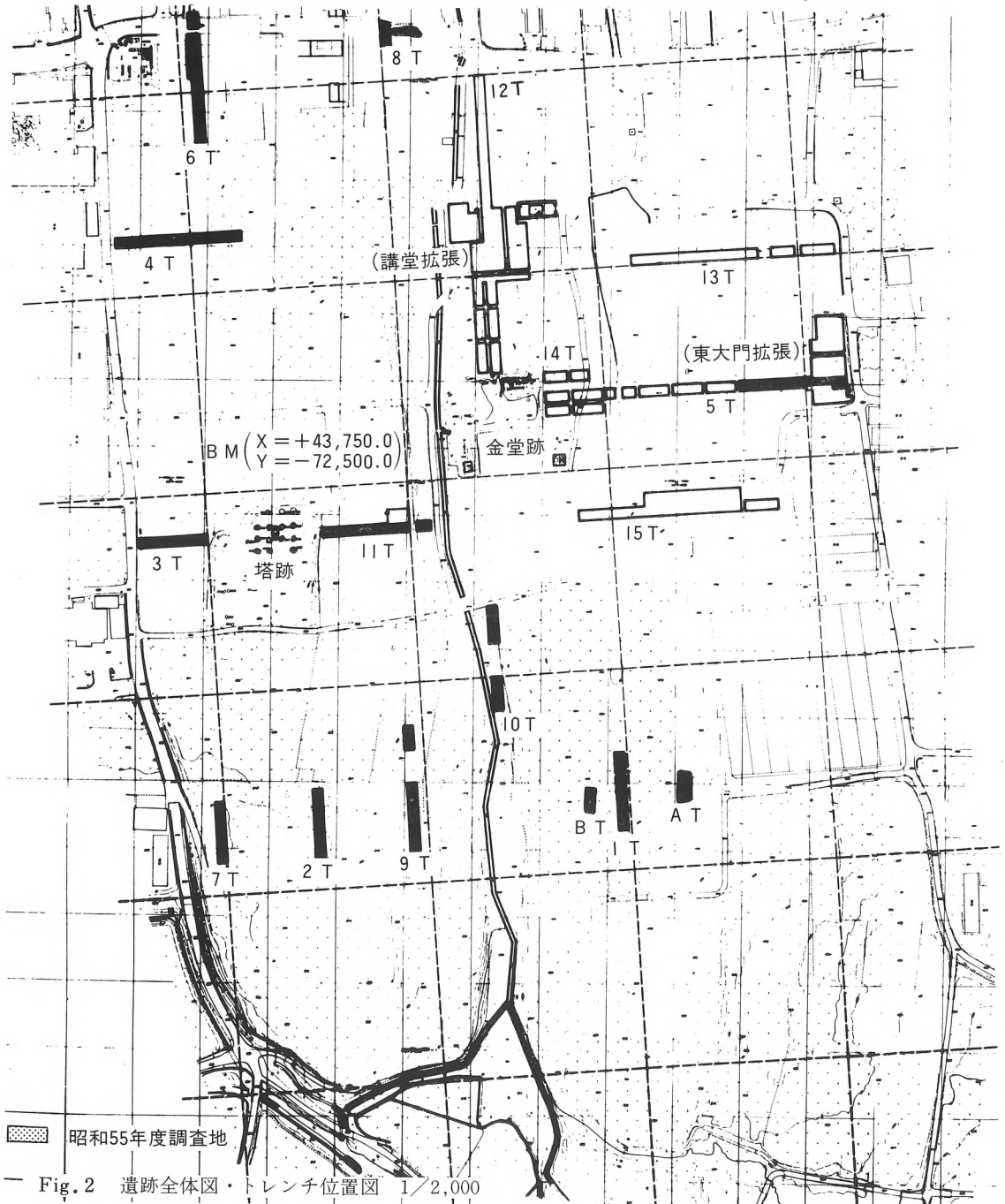


Fig. 3 設定トレンチ

発掘面積 1,580㎡

トレンチ名	位 置	目 的	備 考
5	金堂の東方 (拡張) N21~24 E42~132 (東大門拡張) N17~20 E42~59 N16~42 E122~132	回廊取り付き部の確認 金堂東側の状況調査 東大門および東辺部の確認	昭和55年度調査の継続・拡張
11	塔跡の東方 S 8~15 W 0~6.5	回廊の確認、竪穴住居址の検出	昭和55年度調査の継続・拡張
12	金堂の北方 (拡張) E27~30 N31~120 (講堂拡張) E23~26 N31~70 E17~40 N58~80	北大門および北辺部の確認、僧房の確認 金堂北側の状況調査 講堂の確認	
13	寺域東北部 N60~63 E70~131	東辺部の確認、雑舎などの所在の確認	
14	金堂の東方 N27~30 E42~55.4	金堂東側の状況調査	
15	金堂の南東方 S12~15 E50~110 (拡張) S 8~12 E70~100	回廊の確認、建築遺構の所在の確認	第11トレンチの東延長線上、瓦の出土が伝えられる個所

注 位置は調査の基点から東西南北(E・W・S・N)方向への距離で示し、単位はmである。  
本書では遺構などの位置は全てこの方法で記す。

## 2. 調査の経過

本年度の調査は、昭和56年4月13日から12月26日まで実施し、昭和57年1月6日からは主に出土遺物の整理を行なっている。以下、経過を月ごとに略記する。

4月 調査の手続き・準備のうえ、13日から発掘調査を開始する。金堂北方の第12トレンチから着手し、講堂と推定される周辺を拡張する。礎石据え付け掘形の底部とみられる遺構を検出するが、周辺の残存状況は悪い。金堂東方の第5トレンチに着手する。

5月 第5トレンチの調査。推定東大門周辺を拡張する。瓦片の散布が多くみられるが、遺構の残存状況は良くない。第5トレンチの補助として北側に第14トレンチを設定する。また東辺の確認のため第13トレンチを設定する。

6月 金堂南東方の第15トレンチの調査に着手する。焼土とともに多量の瓦が散布しているのが検出される。推定東大門付近をさらに拡張する。この頃から降雨・雷雨が多く、瓦の水洗いなどを進める。

7月 第15トレンチの調査。第12トレンチを金堂北側まで延長する。精査・写真撮影を行ない、発掘調査に一区切をつける。

8月 今月より作業員数を減らし、精査・実測を進める。8日に浩宮の来跡があり、その準備に追われる。また公有化された土地の雑草対策が深刻化する。台風15号の影響で土砂崩れが発生し、遺構の清掃・養生作業を行なう。

9月 第15トレンチの実測、瓦のとり上げ作業を行なう。推定東大門の東側道路間際で礎石が確認される。22日に整備委員会幹事会を開催する。27日に福田元首相が来跡する。

10月 推定東大門周辺の精査・実測を行なう。

11月 第11トレンチを拡張して竪穴住居址の検出・実測を行なう。講堂推定地を東方に拡張して調査するが残存状況は極めて悪く、遺構は確認できない。

12月 講堂推定地東方の実測を行なう。トレンチの埋め戻し作業を実施する。

1月以降 出土資料の整理作業を行なう。1月13日に整備委員会を開催する。

### 3. 遺 構

寺域内は全体に表土の堆積が薄く、北半部では地表下約20cmで地山となる個所もある。これは自然堆積が少ないことに加えて、土採りなどの人為的な原因にもよる。さらに耕作、家屋の基礎地業が地山にまで達している。このため発掘調査ではほとんどの個所で地山上面まで掘り下げて検出を行なったが、遺構の残存状況は悪く、講堂の位置と規模についての部分的な確認、寺域を想定する上での若干の所見を得るにとどまった。この他に、東辺部では流水による砂礫層と鉄分沈着層の形成がみられ、また東辺部と第11トレンチでは浅間山噴出のB軽石（天仁元年=1108年）の純堆積が認められて、国分寺の変遷に関する資料が得られた。確認された遺構は次の通りである。

掘立柱建物1（奈良） 竪穴住居7（奈良3、平安4） 柱穴列1（奈良～平安） 土塙5（奈良～平安2、中世以降3） 溝4（奈良～平安2、中世以降1、時代不明1） 井戸1（中世） 瓦溜り1（中世）

遺構は次の記号により表示した。

柵列・柱穴列 SA、建物 SB、溝 SD、井戸 SE、築垣など SF、竪穴住居 SJ、土塙 SK、性格不明 SX、

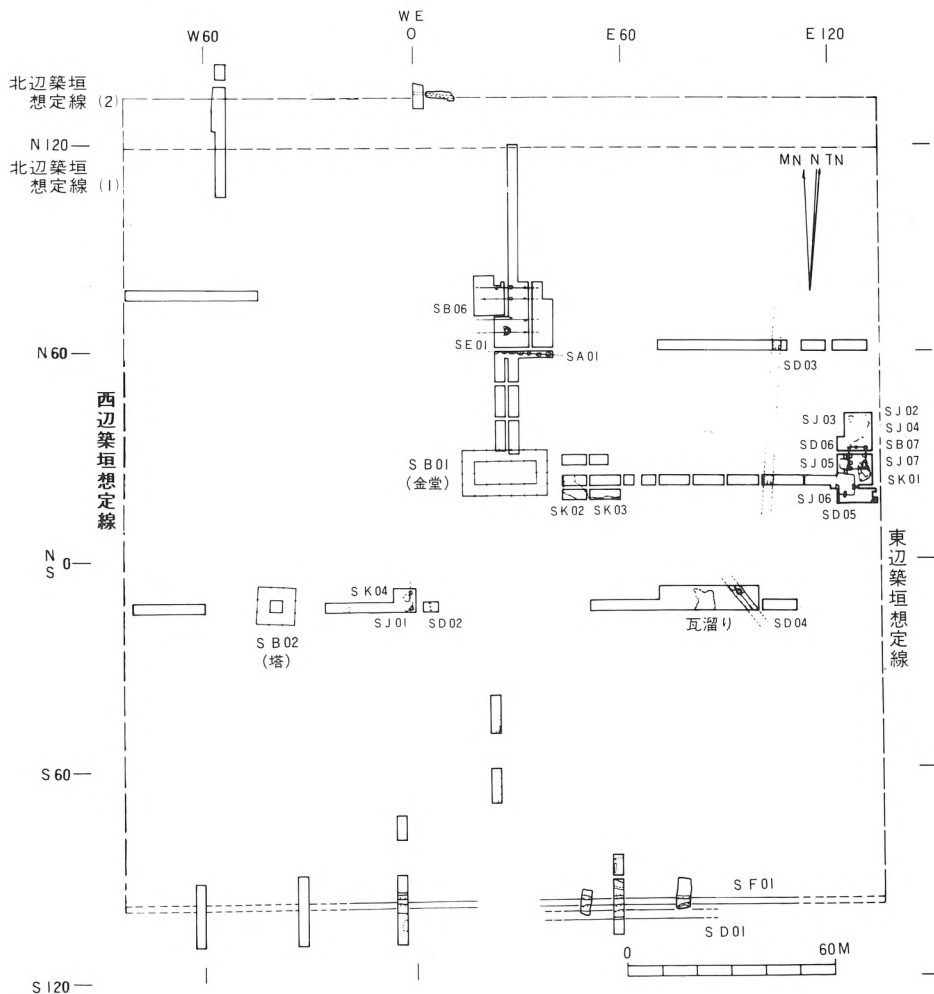


Fig. 4 寺域（築垣位置）・遺構全体図 1/2,000

## 1) 第5トレンチ

金堂東側から寺域東辺に至るトレンチで、E105～132は昭和55年度に調査を実施し、遺構の所在が確認されている。全体に後代の造作および耕作による攪乱がある。地山のロームはE55から東へ向って緩く下っていくが、E74で比高差40cmで立ち上り、東側では高くなる傾向を示している。

S K02 金堂基壇東側に接して掘られた、巾4.5m・深さ約2mで北西—南東に長い不整形の土壌。埋土は淡褐色砂質土で、その下層部から瓦片とともに多数の五輪塔・宝篋印塔・板碑の破片、径30～50cm大の礫が出土した。この中には「至徳二年」（1385年）、「應永十八年」（1411年）の年号を記すものがある。このことから室町時代以降に埋められたものであることがわかるが、その性格については不明である。S K02による攪乱のため金堂と回廊の取りつき状況などは確認できなかった。

S K03 南拡張のE50～59でN18から南への広がりをもつ落ち込みが検出された。暗褐色粘質土面から掘り込んでおり、この縁辺部には小礫が散在していた。底辺近くからは五輪塔・宝篋印塔が出土しており、S K02に似た状況を示している。

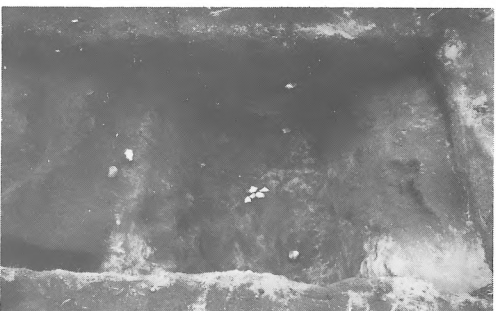
S D03 E100～104で検出された。上部巾3.1m・底部巾1m・深さ1mで、「U」形の断面をもつ素掘り南北溝。ローム面から掘り込んでおり、底部には弱い粘性をもつ暗褐色土が堆積している。掘り込み肩部、底部から瓦片と径10cm大の礫が出土している。S D03の北への延長部が第13トレンチで検出されている。



PL.1 第5トレンチ全景（西から）



PL.2 南拡張E42～59 S K02検出状況  
（西から）



PL.3 S D03検出状況（北から）





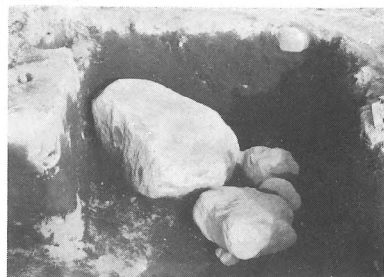
PL.4 東大門周辺全景（北から）



PL.5 東大門周辺 SB07、S J05・07、S K01検出状況（西から）



PL.6 S J06全景（西から）



PL.7 東大門（推定）礎石検出状況（西から）

## 推定東大門周辺

先年度の調査でE127の位置で基壇とみられる立ち上りが検出され、その確認のため周辺を拡張した。この付近ではロームは小さな単位での起伏をみせ、その上に暗褐色土がのっており遺構はこの面で検出された。ただ耕作による溝、家屋の基礎地業による攪乱があり、遺構の残存状況は悪い。

S B 07 E125～130で検出。3間×2間の掘立柱建物で、南北に長く方位は調査基準線とほぼ一致する。ただ東側柱列の南端部はS K 01・S J 06により破壊されており、さらに1間南へ延びる可能性もある。また北側妻の中柱は掘形が浅く、位置も西に寄ることから、これに伴うものか問題は残る。柱穴掘形は一辺が約90cmの方形、深さは40～50cmで、埋土はローム塊を含む黒色粘質土である。柱痕は2ヵ所で検出された。西側柱列南端の掘形の一部がS J 05のカマド構築により切られていることから、これに先行する建物であることがわかる。

S J 05 E123～125で検出。3.3×2.7m、検出面からの深さ約20cmの竪穴住居。柱穴、貯蔵穴は検出されない。東側壁南寄りにカマドを設ける。中央部東寄りをS D 06が南北に切って造られている。出土した土師器坏から、8世紀後半のものとみられる。

S J 06 先年度の調査で基壇と判断された立ち上りは竪穴住居の東側壁であることが判明した。6.0×4.8m、検出面からの深さ約40cmであるが、西辺はS D 05により壊されており明瞭でない。柱穴・貯蔵穴は検出されない。東側壁に大形の瓦を使って焚口・煙道を造ったカマドが設けられている。北東隅床面上に径約30cmの扁平な円形の石が置かれ、その南には白色粘土があった。カマド上部から銅溶解に使用した坩堝の破片、床面から三角形の楔状の石製品および多数の瓦が出土している。出土した土師器甕から、8世紀後半のものとみられる。

S J 02・03・04・07 E124～132で検出。いずれも残存状態は悪く、僅かにカマドと床面の一部が残る。カマドには砂岩質の切石が使われている。S J 07はS K 01を埋めた上に造られている。出土する須恵器碗から、これらは10世紀末～11世紀前半頃のものともみられる。

S K 01 E128～131で検出。5.2×3.7mで南北に長く、深さ約90cmで坩状に掘る土壇。埋土の状況から短い時間に埋められたものとみられ、上層から底部にかけて多量の瓦が混入していた。北端部ではS B 07の柱穴掘形を切っており、また埋土上にはS J 07の床面が造られている。

礎石 N17・E132の史跡地東端で検出。100×70cmで一方が僅かに狭い楕円形を呈する。上面は平坦であるが、西側をやや低くして傾いた状態にある。鉄分の沈着があるローム上にのるようになり、下部には数個の円礫があるが、状況からみて原位置からは移動しているとみられる。この東南側では地山が約50cmの深さに掘られており、粘性のある締った黒色粘質土で埋められている。これが東大門の西側柱列の礎石である可能性は強いが、南・東側は道路にかかるため基壇などの確認はできていない。石質は榛名山二ツ岳起源の角閃石安山岩。

これらの遺構の検出状況からみて、築垣・溝などの東辺を画する施設はさらに東側に位置する可能性が強くなった。またN16～20ではローム上面に鉄分の沈着がみられ、その上に多数の瓦片を含む砂礫層があった。これは西→東の流水によって形成されたものであり、S J 06、S D 05・06の上面にも認められた。この上には風成堆積と考えられる緻密な土質の黒色粘質土が厚さ25～45cmで堆積し、さらにこの上に浅間山B軽石の純堆積がみられ、遺構と併せて東大門付近の変容の状況を知るための資料を得ることができた。

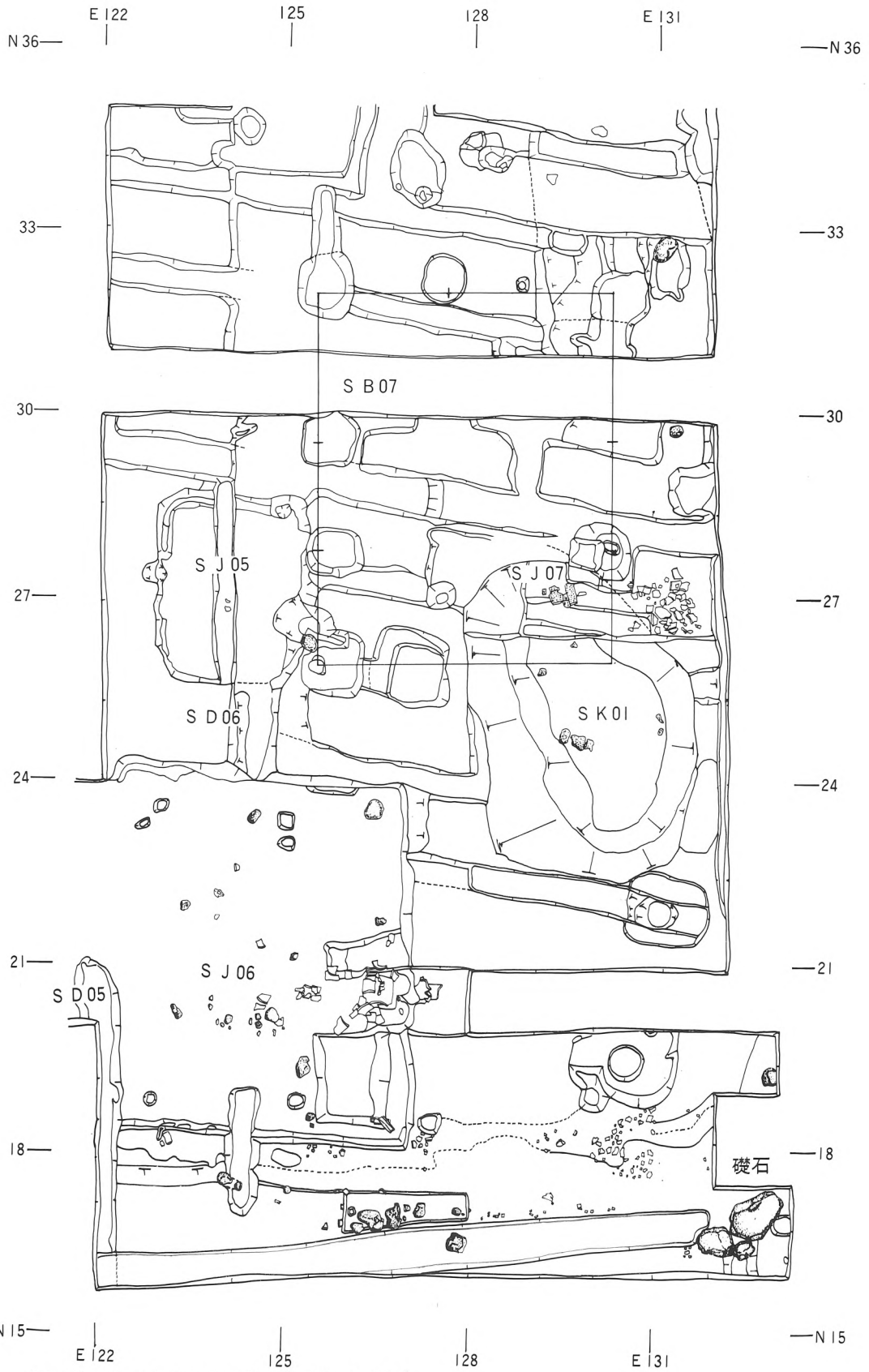


Fig. 5 第5トレンチ・東大門周辺 1/100

## 2) 第11トレンチ

塔跡東側に接した東西方向のトレンチ。先年度の調査によりW3付近で竪穴住居の一部が検出され、その全体を確認するため北側への拡張を行なった。全体に耕作による溝、穴などのため攪乱が進んでいるが、W2~4で浅間山B軽石の純堆積が認められ、その下に暗褐色土層を挟んで締った土質の暗褐色粘質土があり、この上面に瓦片・小礫が散布していた。遺構はこの面で検出された。

S K04 S11・W2で検出。160×200cmの南北に長い楕円形の土壇で、深さ約20cmで皿状に掘る。南半部はS J01埋土を切って造られている。底部および埋土の褐色粘質土中から多数の瓦片と小礫が出土した。

礎石根石 S9・W1で検出。径約80cmの円形で、中央部を深くして掘り込む。この中に小形円礫が密集して入っており、周辺にも多数の礫が散乱していた。金堂の西側柱列からの距離は14.5mを測り、回廊の礎石据えつけの根石である可能性がある。ただこれまでに周辺では同様の遺構は検出されておらず、今後の調査による確認が必要である。

S J01 S10~14・W1~5で検出。4.0×3.5mで東西にやや長く、深さ45cm前後に掘り込まれ、ローム中に床面を造る。各辺の壁直下には巾10cm前後の浅い溝状の掘り込みがある。柱穴・貯蔵穴は検出されない。東側壁中央部に砂岩切石と白色粘土を用いたカマドが造られているが、攪乱が著しく原形をとどめていない。遺物の出土は少ないが、土師器坏が出土しており、これから8世紀後半のものとみられる。



PL.8 第11トレンチ拡張部全景(西から)



PL.9 回廊礎石(推定)の根石検出状況(東から)



PL.10 S K04検出状況 手前断面はS J01の覆土(南から)



PL.11 S J01全景(西から)

SJ01 エレベーション

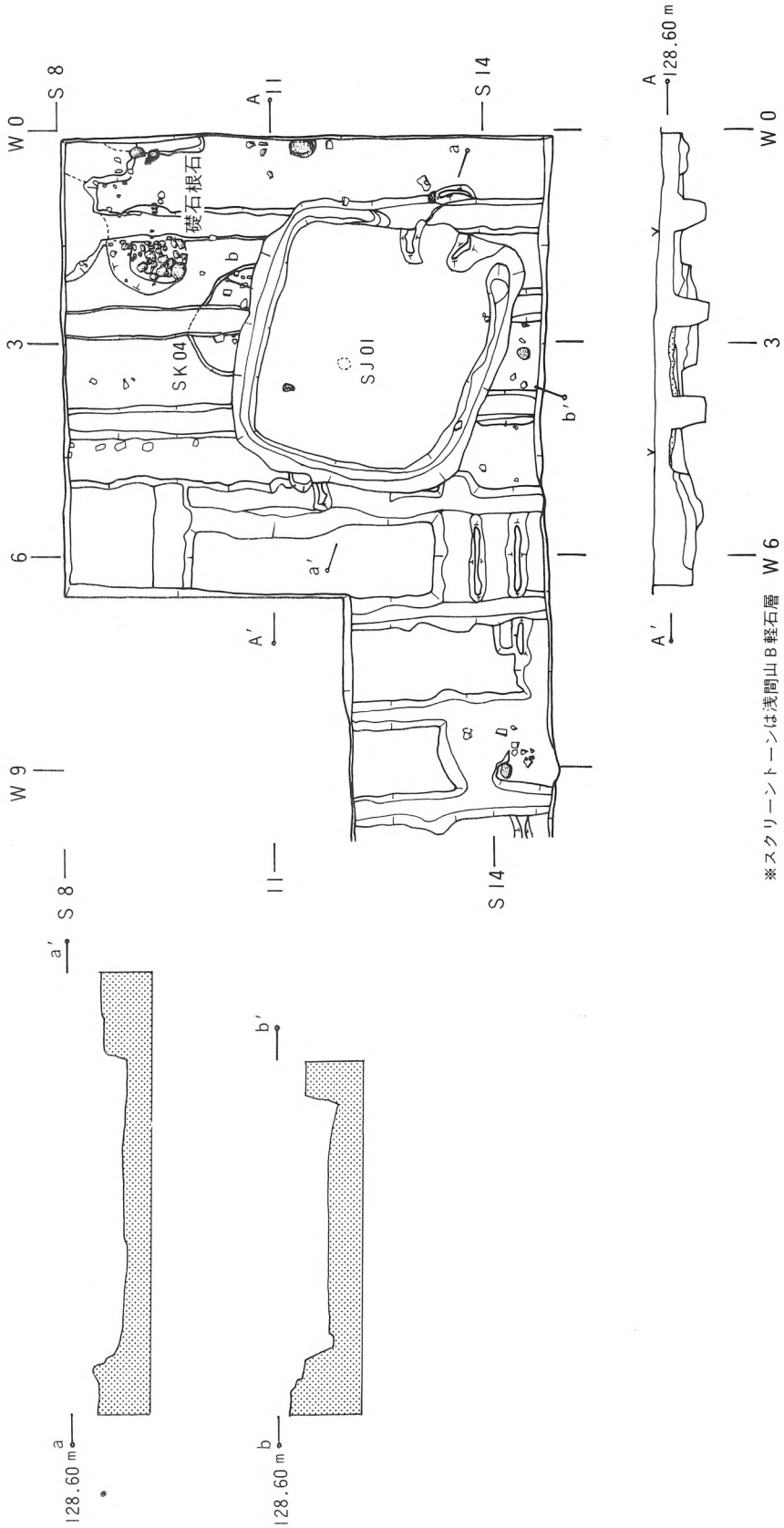


Fig 6 第11トレンチ W0~W9 1/100

### 3) 第12トレンチ

金堂中軸線東側に接し、基壇北側から北辺に至る南北トレンチ。N110~120では北辺または北門の存在が予測されたが、削平が地山にまで及び、後代の攪乱もあってその確認はできなかった。N80~110も同様の攪乱があり僧房などの遺構は確認できなかった。

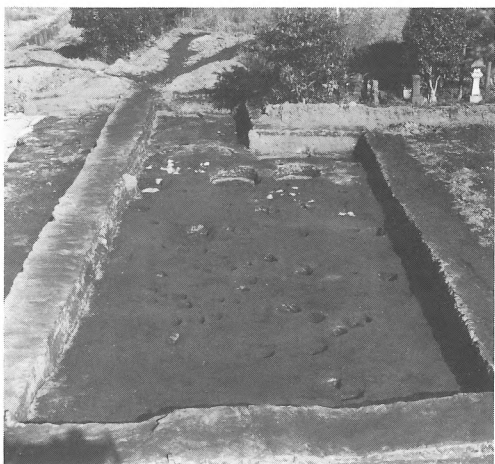
S B 06 E28ライン上の2ヶ所で径約90cmの円形の掘形が検出され、その縁辺には礫が散在していた。この心心距離は330cm、方位は調査基準線に一致する。周辺を拡張したところN65~79・E20~32の範囲の7ヶ所で、これに関係するとみられる掘形または礫の集積を検出した。N78.6・E23で検出の掘形とN78.6・E28の掘形との心心距離は420cmで、中心はE25.8となり金堂の中軸線と一致する。講堂は金堂の北方に配置された可能性の強いことなどを考慮すると、この遺構が講堂の礎石掘形の底部残痕である可能性は強いと言える。規模は、奥行4間で330cm等間と想定できるが、間口は中央部の390—420—390cmの3間分が検出されたのみで、東西両側は攪乱のため確認ができない。また、この付近は地山が金堂周辺よりも約80cm低く、講堂は金堂よりも低い位置に造られていた可能性がある。

S A 01 N60付近で東西方向に並ぶ柱穴7個を検出した。柱間は240~300cmで一定しない。柱穴掘形は長径100~140cm・短径100~130cmの楕円形で、深さ40cmで塊状に掘る。埋土は固く締った黒褐色土で、瓦と礫を含む。柱痕・抜き穴は検出されない。方位はE-0°-Sで、さらに東西に延びるとみられる。

この他に中世以降のものとみられる井戸1基(S E 01)が検出され、また金堂基壇北側に接して埋め込まれた礎石2個が検出された。



P L .12 第12トレンチ全景 正面は金堂基壇  
(北から)



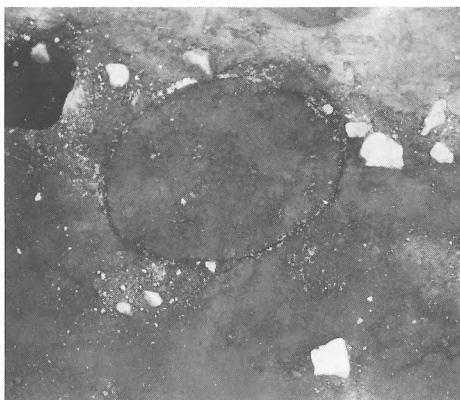
P L .13 講堂跡東拡張部検出状況(南から)



P L . 14 講堂跡検出状況 (北から)



P L . 15 講堂跡検出状況・部分 (南から)



P L . 16 講堂跡礎石据え付け掘形検出状況

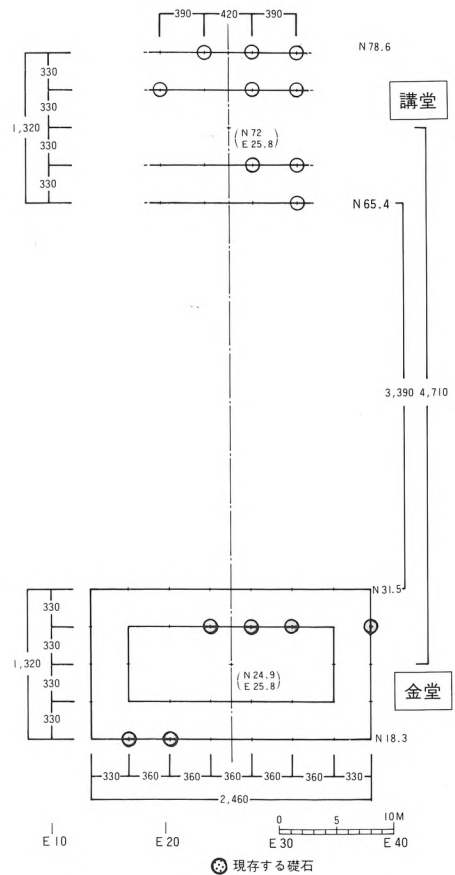


Fig. 7 金堂と講堂の位置 (単位cm)



PL.17 第12トレンチ全景（南から）



PL.18 S A 01検出状況（東から）



PL.19 S A 01 N 59・E 38掘形断面検出状況  
（北から）



PL.20 金堂基壇北側落とし込み礎石検出状況  
（北から）



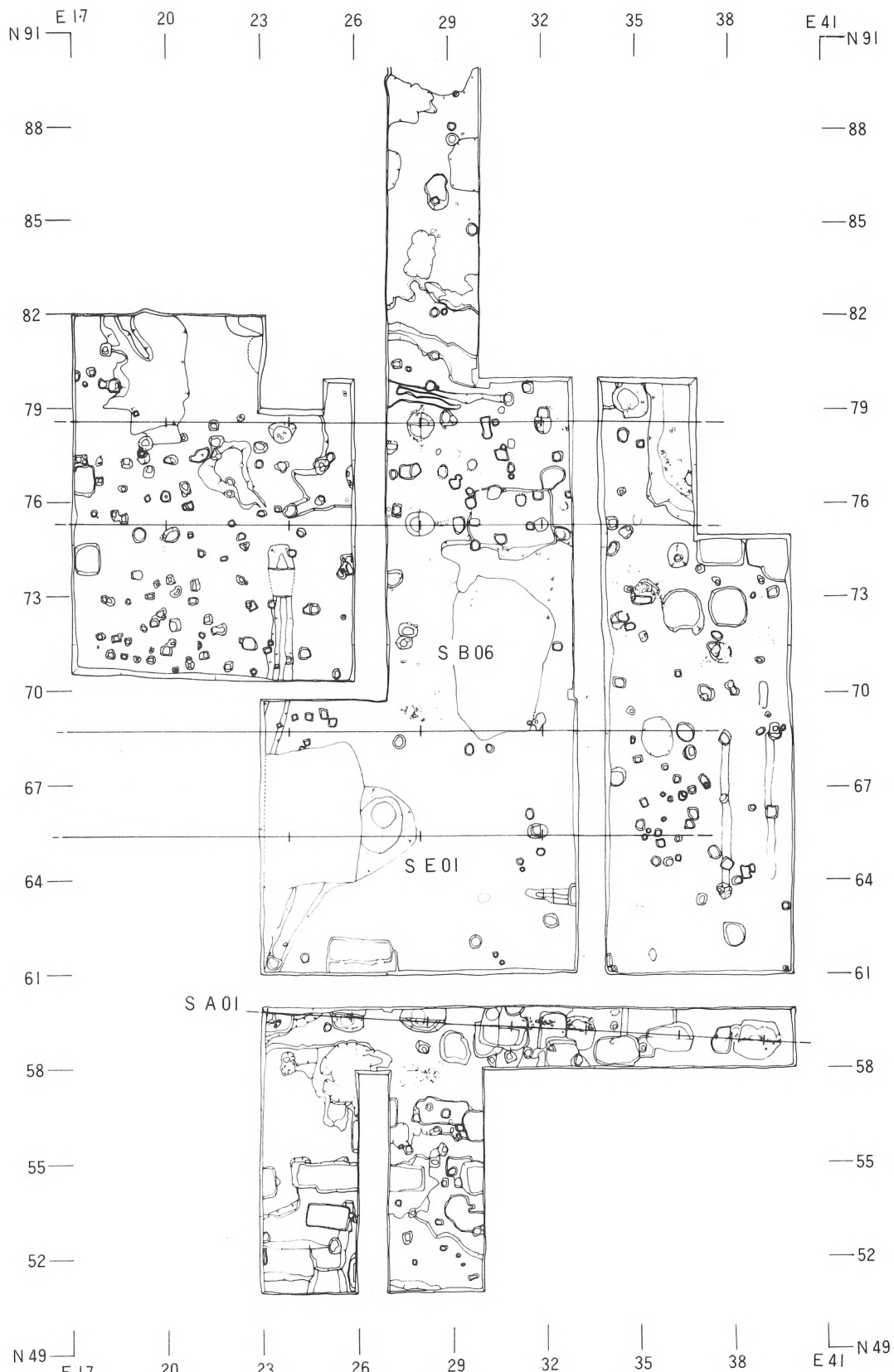


Fig. 8 第12トレンチ N51~N90 1/200

#### 4) 第13トレンチ

東辺外郭施設の確認のため第5トレンチの北側に設定した。表土の堆積が薄く、全体に耕作と家屋の基礎地業による攪乱が著しいため地山まで掘り下げて検出を行なった。

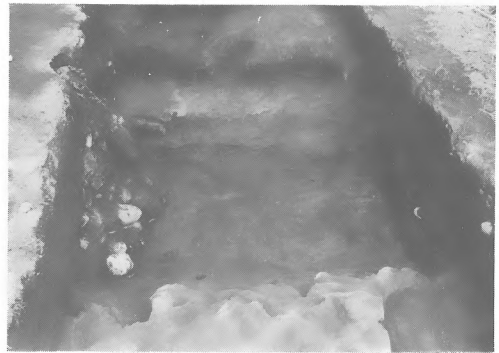
東辺近くのE110~131では、ローム面まで削平をうけており、耕作による溝、小柱穴が散在するのみで、築垣・溝など国分寺に直接関連する遺構は検出されなかった。

S D03 E104~106で検出された。上部巾2.7m・底部巾0.9~1.1m・深さ1.2mで、「U」形の断面をもつ素掘りの南北溝。地山の黄褐色砂質土面から掘り込んでいるが、東岸上部は家屋の便槽のために破壊されている。溝の北半部では、大人の拳大~径50cm程度の礫が密集して埋め込まれていた。埋土中からは少量の瓦片が出土したが、底部から室町時代のものとみられる宝篋印塔の塔身が出土した。この溝は方位・形状から第5トレンチで検出した南北溝の北方延長部分とみられる。方位はN-0°30'-Eで、底部は北へ向って緩く下っている。このS D03が廃されたのは室町時代以降とみられる。

第13トレンチでは、全体に径30cm前後の円形・方形の柱穴が検出されたが建物としてのまとまりは明瞭でない。また巾1.8~2.0m・深さ30cm程度の南北方向の溝が2ヶ所で確認されたが、時期・性格は不明である。遺物は瓦片が少量出土した程度である。



P L.21 第13トレンチ全景（西から）



P L.22 S D03検出状況（西から）

### 5) 第14トレンチ

金堂基壇東側に接した東西トレンチ。第5トレンチでは攪乱が激しく、金堂基壇東側の状況が把握できないため、残存状況の良いとみられる北側に設置した。

E42~45では地表下約20cmで礫混り黄褐色砂質土の地山となり、この面まで攪乱が及んでいる。地山は東へ向って緩く下っている。現地境および基壇東北隅に置かれた地蔵菩薩へ至る小路の下には多量の瓦小片・小礫が埋め込まれていた。国分寺に直接関連する遺構は確認されなかった。



P.L.23 第14トレンチ全景（西から）



P.L.24 E42~49 地境埋め込み瓦片検出状況  
（西から）

## 6) 第15トレンチ

金堂跡の東南方、第12トレンチの東延長線上にあたり、金堂中軸線をはさんで西側の塔跡と相対する位置にある。この付近は現地形では浅い窪地状を呈し、耕作に伴い多量の瓦が出土している。

E50~70では地表下20~30cmでローム質の地山となり、耕作による攪乱が著しい。このため回廊とみられる遺構は確認されなかったが、E52~59・E62~67では地山が僅かに高くなっている点に注意される。地山はE67~72で東に向かって下り、E77でさらに約30cm低くなる。この付近ではローム上に浅間山C軽石を含む黒色粘質土が薄く堆積し、この直上まで瓦の散布がみられる。地山は最低部で標高126.5mとなるが、E98~100で再び高くなり、E100~110では平坦となっている。

E72~75の範囲に焼土を含みよく締った暗褐色粘質土があり、この面で径30cm前後の円形・方形の柱穴が多数検出された。またこの東側に巾約2m・高さ約15cmで固く締った暗褐色粘質土が南北方向の帯状にあった。中世以降のものとみられるが、性格などは不明である。

S D 04 E90~99で北西から南東にかけて素掘りの溝が検出された。上部巾2.7m・底部巾30cm・深さ70cmで「V」形の断面をもつ。溝の中央部S10・E93に上部径1.5m・底部径1.0m・深さ60cmの井戸状の掘り込みが造られている。また東岸の中段には平坦な面が造られており、西岸縁辺付近には溝に並行する柱穴が検出されている。溝の方位はN-43°-Wで、北が僅かに高い。埋土および底部から瓦の出土がみられ、国分寺に関する溝の可能性も考えられる。

以上の所見から、この付近に東塔などの大規模な建造物が存在したとはみられない。



P.L.25 第15トレンチ全景・拡張前（西から）



P.L.26 第15トレンチ全景・拡張前 正面は塔跡基壇（東から）



P.L.27 E70~79 小柱穴群検出状況（南から）



P L.28 E50~100 S D04 瓦溜り検出状況 (東から)



P L.29 S D04全景 (南から)

## 瓦溜り

E80~87では、地山上によく締った暗褐色土がのり、その上に夥しい量の瓦・壁土・漆喰片・木炭・焼土を含む暗褐色土が、山盛状に堆積しているのが検出された。この堆積はS9付近を北端とし、S15よりさらに南へ広がっているとみられる。中央部の厚さ60cmで外側に向かって薄くなっていく。

この瓦溜りには創建期の軒先瓦をはじめ、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の完形に近い大形片を多数含み、これらが乱雑な状態で密集しており、その間に壁土・木炭片などが入り込んでいた。またこの下部には断面が「L」形の切り込みをもつ凝灰岩切石があり、建物の部材を一括して廃棄した状況を示している。瓦に混って内耳埴形土器1個体分、石臼などが出土しており、この瓦溜りの形成は中世であるとみられる。これら出土遺物の調査が進むにつれより具体的な年代を与えられよう。



P.L.30 瓦溜り出土状態



P.L.31 内耳埴形土器出土状態



P.L.32 E80~90 瓦溜り検出状況(南から)



Fig. 9 第15トレンチ E78~E99 1/100

#### 4. 遺 物

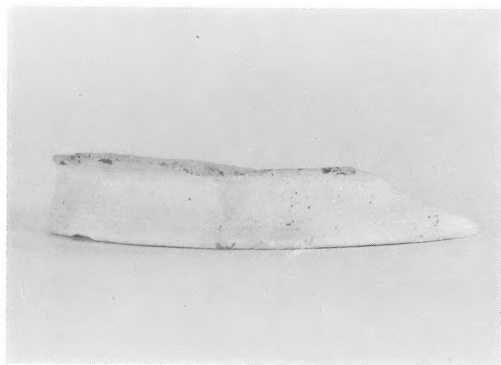
瓦を主として多量の遺物が出土しているが、現在整理中であるため、その概要についての紹介をする。

出土量は、瓦がコンテナパット82個分・20kg入飼料袋497袋分、土器類がコンテナパット28個分、石造物70点で、この他に円面硯、坩堝片、鉄釘、凝灰岩切石などがある。

##### 土 器 類

遺構に伴うものに、東大門周辺のS J 02・03・04・05・06・07、塔跡東側のS J 01の竪穴住居から出土した土師器杯・甕、須恵器埴類と、第15トレンチ瓦溜りから出土した内耳埴形土器・摺鉢片などがある。このうちS J 01・05・06出土の土師器杯・甕は8世紀後半のものであり、国分寺の創建時期とこれらの住居の存続時期とが重なり合う。またS J 02・03・04・07に伴って須恵器の高台付埴があるが、これらは10世紀末～11世紀前半のものともみられ、この頃の国分寺の様相を探る上での手懸りとなる。この中の1点には「福」の墨書がある。

遺構に伴わないものに、奈良三彩とみられる高台の破片1点、表面に輪宝、裏面に「申」と墨書した鎮壇具とみられる中世の素焼きの土器1点、燈明皿などがある。



P L .33 第11トレンチ出土 奈良三彩



P L .34 第5トレンチ S J 05出土 土師器杯



P L .35 第5トレンチ S J 06出土 土師器杯

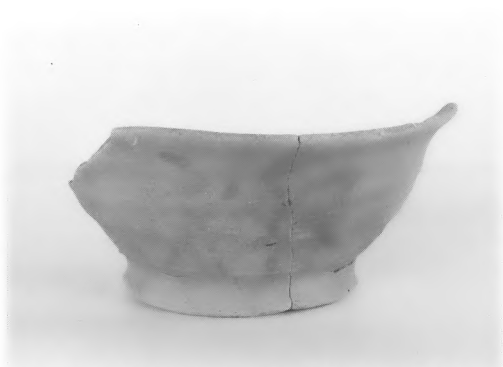


P L .36 第5トレンチ S D 04出土 土師器杯

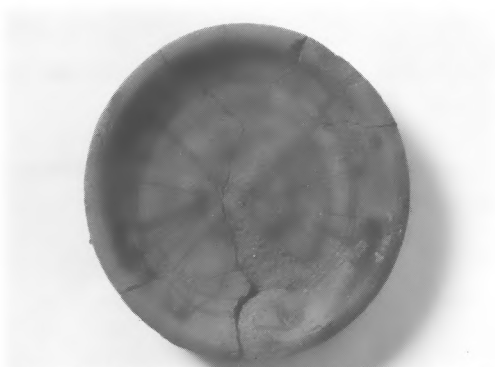


P L .37 第11トレンチ出土 土師器杯





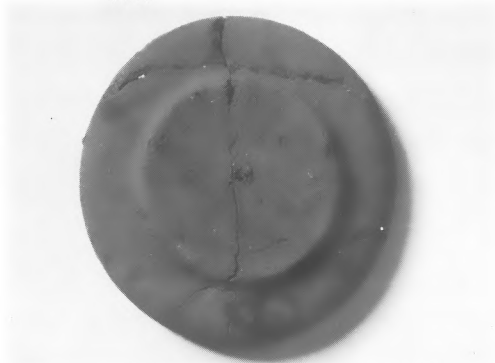
PL.38 第5トレンチ S J 02出土 須恵器碗  
墨書「福」



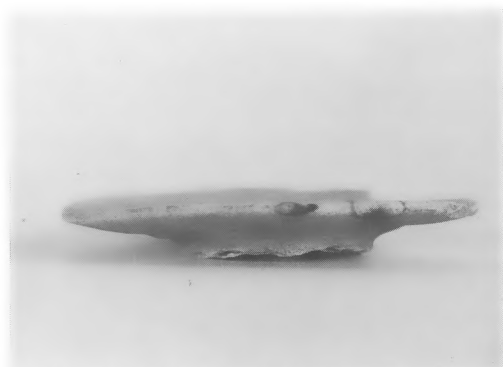
PL.42 第12トレンチ出土 素焼土器(鎮壇具)  
(表)



PL.39 第5トレンチ S J 02出土 須恵器碗



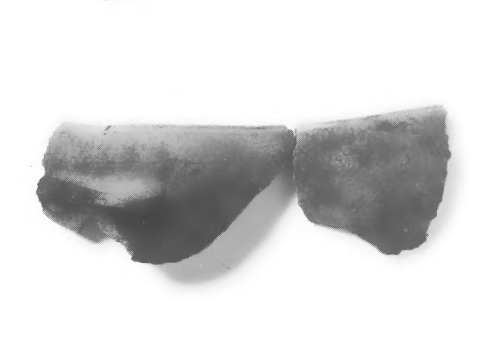
PL.43 第12トレンチ出土 同 上 (裏)



PL.40 第5トレンチ 東大門周辺出土 土師  
器皿



PL.44 第5トレンチ S K 02出土 燈明皿



PL.41 第5トレンチ S K 02出土 羽釜



PL.45 第5トレンチ S K 02出土 皿

## 瓦

瓦の出土は東大門周辺と第15トレンチ瓦溜りに多く、次いで金堂東側およびS D03・04に多くみられた。その反面、第13トレンチ・第12トレンチ北半部では僅かであり、推定講堂跡周辺では予想外に少ない状況があった。

東大門周辺のE 129～132では創建期の軒丸瓦を含む大形の瓦片が数ヶ所に固っており、S J06ではカマドの構築に平瓦が使用されていた。またS K01の埋土からは吉井町雑木味遺跡出土の六葉複弁の軒丸瓦と同型のもの1点が出土した。瓦溜りからは軒先瓦をはじめ夥しい量の瓦が出土したが、伴出遺物などからみて金堂に使用されていたものが廃棄された可能性がある。この他に鬼瓦の小片が4点、瓦磚とみられる小片1点などがある。文字瓦はへら描きによるもの、押印によるものなど300点近くある。



P L.48 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒丸瓦



P L.49 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒丸瓦



P L.46 第5トレンチ S K01出土  
軒丸瓦（雑木味遺跡出土と同型）



P L.50 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒丸瓦



P L.47 第5トレンチ 東大門周辺出土 軒丸瓦



P L.51 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒丸瓦



P.L.52 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒平瓦



P.L.54 第15トレンチ S D04出土 軒平瓦



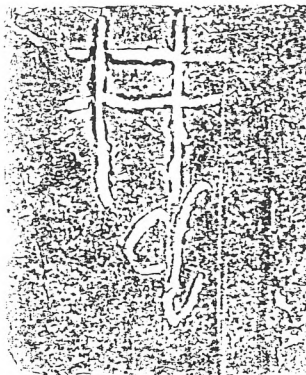
P.L.53 第15トレンチ 瓦溜り出土 軒平瓦



P.L.55 第15トレンチ S D04出土 軒平瓦



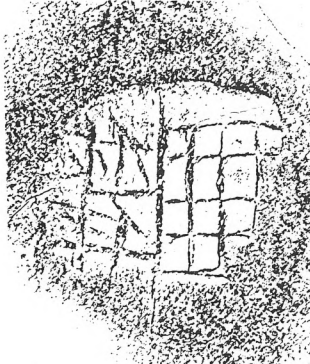
P.L.56 第15トレンチ瓦溜り出土  
文字瓦「子南」



P.L.57 第15トレンチ瓦溜り出土  
文字瓦「㊦」



P.L.58 第15トレンチ瓦溜り出土  
押印瓦「當」+へラ描き「右」



P.L.59 第15トレンチ 瓦溜り  
出土 押印瓦「佐位」(裏字)



P.L.60 第15トレンチ出土  
押印瓦「山田五子」(裏字)



P.L.61 第15トレンチ 瓦溜り  
出土 押印瓦「多」

石 造 物

金堂基壇上および周辺の墓地内には五輪塔宝篋印塔が多数あり、周辺を耕作した際にもこれらの出土があったと言われている。今回の調査においても金堂基壇東側のSK02・03からは多数の五輪塔・宝篋印塔・板碑破片が出土し、この中には「至徳二年」（1385年）「應永十八年」（1411年）の年号をもつものがある。またSD03からは室町時代のものと思われる宝篋印塔塔身1点、SE01の底部から五輪塔地輪2点が出土している。これら中世の石造物は、国分寺の衰退に伴い金堂周辺がどのように変化していったかを示す資料である。

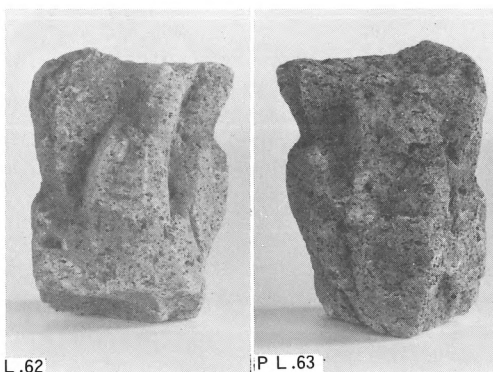
SK04からは角閃石安山岩塊を彫った用途不明の加工品が出土しているほか、寺域内からは同質の石を加工したものが数個出土している。



PL.65 第5トレンチ SK02出土 五輪塔(火輪)



PL.66 第5トレンチ SK02出土 宝篋印塔(笠)



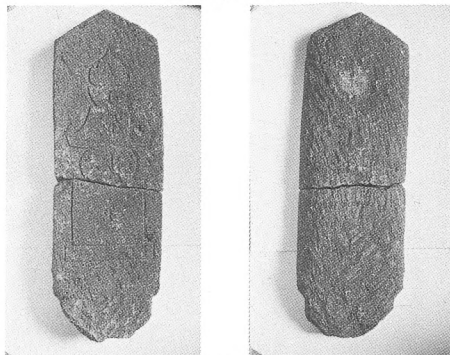
PL.62 第11トレンチ SK04出土 角閃石安山岩加工品(表)  
PL.63 同 左 (裏)



PL.67 第5トレンチ SK02出土 宝篋印塔台石「至徳二年」銘



PL.64 第15トレンチ 瓦溜り出土 石白

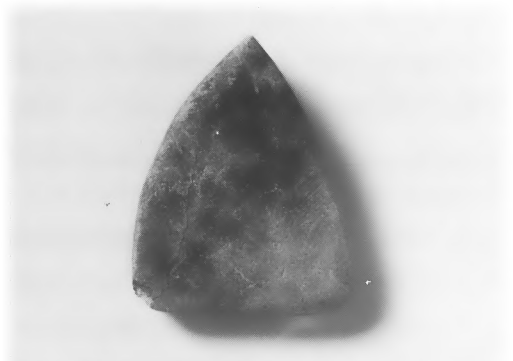


PL.68 第5トレンチSK02出土 五輪塔板碑(表)  
PL.69 同 左 (裏)

そ の 他

第15トレンチの表土下から透し高台をもつ円面硯の破片が出土した。須恵器質の堅緻な焼成で、陸の部分は滑かのでよく使い込まれた状態を示している。東大門付近の砂礫層と塔跡東側のS K04から瓦塔片が出土している。焼成は良好で淡赤褐色を呈し、成形も比較的丁寧である。S J06では床面上から多数の瓦片とともに三角形の楔状石製品が1点、カマド上部から銅溶解に使用したとみられる坩堝の破片1点が出土しており、この竪穴住居が工場である可能性を示している。第15トレンチ瓦溜りからは鉄釘・壁土・漆喰片・溶解した銅の小片など、建築部材が出土している。

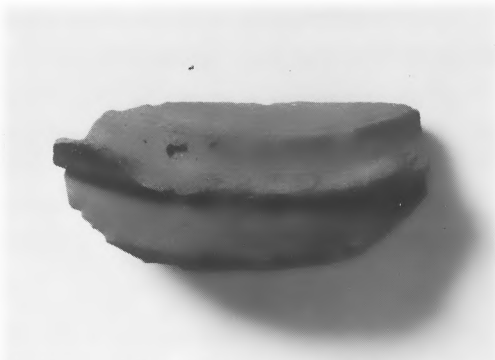
この他に、波形の凹凸をもつ用途不明の瓦状製品の小片、瓦を円盤状に削ったものなどが出土している。



PL.72 第5トレンチ S J06出土 楔状石製品



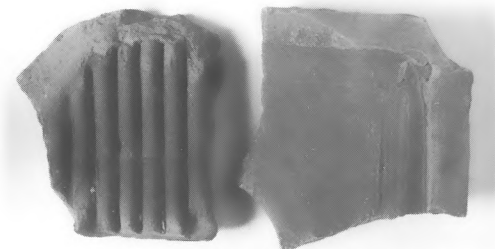
PL.73 第5トレンチ S J06出土 坩堝



PL.70 第15トレンチ出土 円面硯



PL.74 第15トレンチ 瓦溜り出土 壁土・漆喰



PL.71 (左)第5トレンチ 東大門周辺出土 瓦塔  
(右)第11トレンチ S K04出土 瓦塔



PL.75 (左)第11トレンチ出土(左から2番目)第5トレンチ  
東大門周辺出土(右4点)第15トレンチ瓦溜り出土

## V ま と め

寺域については、先年度の調査において南辺の築垣と溝が確認され、また金堂跡の実測によりその中心点を設定することによって、金堂中心—南辺築垣中心の距離は123.6mであることがわかった。これらの成果にもとずいて東辺の確認調査を実施したが、史跡地内では築垣・東大門基壇などは検出されず、土壇・竪穴住居など寺域内と推察される状況があった。またN17・E132で礎石1個が検出され、東側の道路を挟んで同様の石1個の所在が確認されていることから、この付近に東大門のあった可能性は強いと言える。金堂中心から礎石までは106.8mを測り、これを原位置に近いものと想定し、『上野国交替実録帳』で南大門を「広一丈五尺」とするのを東大門にも当てはめて1尺=30cmで換算してみると、金堂中心—東大門中心は109.05mとなり、現在の道路の中央付近となる。この値は条里制の1町の長さに近く、これを西側に折り返すと史跡地西側の道路上にのる。このことと先年度の西辺部での調査の結果とを併せてみると、東・西辺の築垣の位置は現在の道路に重なり合う可能性が強い。ただ道路は東西で方位がやや異なり、直線でない部分もある。また築垣状の高まりは全く認められず、むしろ周囲より低くなっている、などの問題もある。北辺については築垣の位置を、(1)南辺築垣中心から2町=218.1mとみるか、(2)金堂中心から1町=109.05mとみるかによって異なってくる。(1)の場合は第12トレンチおよび先年度調査の第6トレンチが想定位置を横断しているが、遺構の所在は確認されていない。またこの場合、金堂が寺域の中央よりかなり北に寄った位置となり、講堂と北辺築垣との間が30m前後でやや狭くなる。(2)の場合では史跡地北西隅の墓地を横断し、金堂北方で北側の道路上にのり、東半部では道路北側となる。先年度調査の第8トレンチで、この想定線位置に石列が検出されたが後代のものであることが判明した。この場合築垣の位置は、金堂中心から東・西・北辺築垣中心までは109.05m=1町であるが、南辺までは123.6mで、南北に長い形状となり、従来考えられてきた「方2町」の正方形とは異なってくる。ただ「方2町」の史料的根拠である『上野国交替実録帳』は、既に滅失したものとして「築垣壹廻四面貳町 長参佰貳丈壹尺」を掲げるものであって、必ずしも寺域が2町四方であるとしているのではない。むしろ築垣の長さが302丈1尺とする記事を尊重するならば(2)の方がより近い数値となり、この想定の高蓋性の高いことを示している。いずれにせよ寺域については、東南隅・北西隅でさらに確認調査を実施し、併せて東大門についてもさらに周辺を拡張し、門・築垣・溝の所在と構造とを確認する必要がある。

主要伽藍については、金堂の北方で講堂跡とみられる遺構を検出した。この周辺は攪乱が激しく全容の確認はできなかったが、中軸線を金堂のそれと一致させ、奥行4間で柱間は330cm等間と金堂と同規模で、礎石建物とみられることから、講堂である可能性は強いと判断をした。地形的にみると講堂付近は金堂周辺に比べ約80cm低くなっており、検出状況からみて講堂基壇は金堂基壇よりもかなり低い位置に造られたものとみられる。回廊は金堂周辺が後代の造作と耕作による攪乱をうけているため、第11トレンチで礎石根石とみられるものを1ヶ所で検出したのみである。今後、この南・北側への延びを確認することが必要である。

第15トレンチで検出された瓦溜りは、瓦片を包含する層の上であり、内耳埴形土器・摺鉢片・石臼などを含むことから、中世に形成されたものとみられる。また瓦とともに地覆石らしい凝灰岩切石、壁土、漆喰片などの建築部材が出土しており、その位置からみてこれらは金堂のも

のである可能性がある。その場合、金堂周辺から多量に出土する南北朝～室町時代の五輪塔・宝篋印塔との関連で、この頃に金堂基壇周辺が墓域とされ、その際に建物の残骸が廃棄されたということも考えられる。これについては金堂基壇の調査によって、遺構・遺物の面から検証することができよう。

東大門付近のN16～20では、ローム面上に瓦片を含んだ砂礫層があり、流水のあったことがわかった。この砂礫層上には風成堆積の黒色粘質土層が、その上に浅間山B軽石の純堆積が認められた。この状況は、ここがB軽石の降下する以前に既に使用されなくなっていたことを示すもので、先年度調査の南辺築垣北側と似た様相をみせている。『上野国交替実録帳』の記事と併せて、国分寺の変容を知る上での重要な資料である。この点から、今後寺域内外でのB軽石の残存状況には特に注意を要する。

以上、今年度の調査の概要と問題点について述べてきたが、今後は従来の所説を逐一検証しながら調査を進め、併せて関連諸分野の研究成果を援用して、国分寺の実像とその変遷の解明にあたる必要がますます強まったと言える。

文末となったが、今回の調査にあたり有形無形の多大なご援助を与えていただいた地元関係者、貴重なご指導を頂いた多くの方々、各機関に深く感謝をし、報文のまとめとする。

#### 参考文献（寺域について論及するもの）

- 福島武雄「上野国々分寺址考」 上毛及上毛人 53号 1921年  
宮地直一「上野の国分寺に就いて(上)・(下)」 史蹟名勝天然記念物 第1集第2・3号 1926年  
内務省 「上野国分寺址」 埼玉茨城群馬三県下に於ける指定史蹟(史蹟調査報告第二) 1927年  
群馬県 「上野国分寺址」 群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第1輯 1929年  
相川龍雄「上野国分寺」 国分寺の研究 上巻 1938年  
太田静六他「上野国分寺伽藍の研究」 建築学会論文集 第27号 1942年  
太田静六「上野国分寺伽藍の諸性質(上)・(下)」 史蹟名勝天然記念物 第18集第8・9号 1943年  
石田茂作『東大寺と国分寺』 至文堂 1959年  
前沢和之「「上野国交替実録帳」国分寺項について」群馬県立歴史博物館紀要 1号 1980年

#### 調査関係者（敬称略）

整備委員会 委員長・大岡軍之丞、副委員長・坪井清足、委員・大塚初重、平野邦雄、近藤義雄、藤井精一、田中綾治、小寺弘之、金子允、横山巖、石川正雄、幹事・田中哲雄、福田拓、松島栄治、松山享玄、山本肇、内山道善、井上唯雄、関 茂、森田秀策、岸 栄、前沢和之

調査担当 群馬県教育委員会文化財保護課 文化財保護主事・前沢和之、洞口正史

発掘作業員 一倉ヤヨイ、伊藤もと、入沢喜一、入沢タケノ、上原隆子、内山ユト、片山幾子、金井モトエ、木村長正、倉林恵美子、静キヌエ、渋谷ユキ、清水理春、白井テル、住谷紀子、田原かねえ、塚田トヨ、塚田マサエ、塚田みさほ、塚田光代、塚田幸雄、仲野俊雄、峰須賀トミ子、東野菊江、東野ノブ子、松田郁雄 中江英明、関口功一（立教大）、井上哲郎（立教大）

指導 群馬大学教育学部教授 新井房夫（地学）

協力 前橋市教育委員会、群馬町教育委員会、群馬町東国分区、群馬県埋蔵文化財調査事業団  
その他に住谷隆司、住谷宗七、桜場一寿ほか多数の方々のご協力とご指導をいただいた。

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 2

印 刷 昭和57年 3月30日

発 行 昭和57年 3月31日

発 行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町 1丁目 1の 1

TEL 0272-23-1111

編 集 群馬県教育委員会文化財保護課

印 刷 進広堂印刷株式会社